

梶山季之

常陽銀行事件

ドキュメント日本の地下水

「平和新書」は、あなたの図書館です。この本をお読みになつての
ご意見、ご希望などをおよせください。
頭脳のレクリエーション、新しい生き方の工夫、現代の探究……
「平和新書」はこうした本をあなたとともに発行してゆきたいと思つております。

「平和新書」編集部

『常陽銀行事件』

平和新書

昭和38年6月15日 発行

260円

著 者 梶 山 季 之

発行者 兵 頭 武 郎

印刷者 長 苗 三 郎

製本所 大 口 製 本

発行所 アサヒ芸能出版株式会社

東京都港区芝新橋4の34 TEL (581) 6261

乱丁・落丁本はおとりかえします

(検印廃止)

梶山季之

常陽銀行事件

ドキュメント 日本の地下水



平和新書

目 次

常陽銀行事件……………7

■マダム豊田に囃らされた一支店長

ストライキの果て……………33

■王子争議のもたらしたもの

白い共産部落……………67

■下着も共有の桃源境

やくざの勲章……………105

■浜松市街戦

不死鳥……………135

■財閥の葬儀委員たち

赤線深く静かに潜航す……………157

■ステッキ・ガールという名の淑女たち

「与路の獣」島……………181

■日本の文化果つるところ

あとがき……………217

表紙カバー・さしえ／小松久子

常 陽 銀 行 事 件

—マダム豊田にら躍らされた一支店長—

その豊満な肉体をエサにマダム豊田は進駐軍の高官に近づき、それを利用して常陽銀行の郡山支店をくいつぶしてしまった。栄華をきわめたマダム豊田もいまは零落し、外人相手に体売っているという。戦後経済のかたすみに咲いたアダ花であった。

その二階建の洋館は、横浜名物となった外人墓地がある高台——山手町にあつた。

附近は、接収された外人住宅ばかりで、元町プールが眼下に見下ろされる。ここには占領下の日本人の生活とは縁遠い、バタ臭い雰囲気が漂っているようであつた。

常陽銀行郡山支店長の信田^{しだ}頼^{たの}徳^{とく}は、立ち停つて、なにかを祈るような眼差しで、門柱に掲げられた「TOYODA」^{トヨタ}という横文字の標札をみた。

玄関までのかなりの距離を、よく手入れされた植込と芝生が続いている。

／＼なるほど……第八軍司令官アイケルバーガー中将の愛妾という噂は、ほんとらしいな。そうでもなければ、こんな堂々たる接収家屋に日本人の女が住める道理がない／＼

信田は、そう思つて安堵すると共に、ある種の期待に眼を輝かせた。

紹介の労をとつてくれた小川氏の話によると、マダム豊田は、元島津女官長の令妹だそうである。英、独、仏、伊の四カ国語に堪能なところから、占領軍の高官と親交があり、さきごろ帰国したアイケルバーガー中将などは、彼女に恋の虜となつていたという。

このため、幣原喜重郎や芦田均といった政界の大立物も、涉外関係でゴタゴタが起きると、

決して豊田詣でをするということだった。特にパーシ組の財界人は、追放解除のため日参し、夜は連日、占領軍の将官級のパーティで賑わっているという話である。

△マダム豊田が、私の力になってくれればいいが……▽

連れから促されて、信田穎徳は歩きだした。玄関の呼鈴をおす。すると二十七、八の瘦せた女中が現われ、来意を告げると、すぐ玄関の左脇の応接間に彼らを導いた。

「ここで暫く、お待ち下さいませ」

応接間に、足を一步踏み入れた信田は、思わず目を瞠った。あまりにも豪華な室内の装飾、調度品に目を奪われたのである。

ソファの掛布は、すべて古金欄が用いてあった。そして正面には、由緒ありげな大屏風がおかれてある。天井からは水晶のシャンデリアが吊り下げられ、絨緞もペルシャ製らしい。

棚には銀の花瓶、陶磁器、香炉、純金製の眩いばかりの宝船の置物など、和洋の美術品が無造作に飾ってあった。

見識のある人物が見れば、それらの調度品が、何の秩序もなく、まるで美術商のショウウィンドウ然と、ただごたごた並べられていることに眉をひそめたであろうが、信田穎徳は、さしたる学歴もなく、二十五年間コツコツ叩き上げただけが取得の地方銀行マンだったのだ。

彼は、この俗悪な趣味を豪華な暮しと解釈したのである。悲劇は、先ずこの錯覚から始まっ

た。というのも、彼はいま金に飢えていたからである。

常陽銀行といえば、茨城県に本拠をおく、かなり名の売れた地方銀行だった。そして信田は、新しく設置された郡山支店の初代支店長だった。赴任したのは、ラバウルから復員した翌年——昭和二十二年三月のことである。

支店長という栄職についた信田は、日夜、預金獲得に走り回った。その苦労の甲斐あって、郡山支店は、抜群の成績を上げた。彼の得意や思うべしである。

さらに郡山の大火の際、支店の建物は類焼して焼失してしまった。だが幸運にも彼は大火の二時間前に、かねて狙いをつけていた店舗を購入しており、類焼を免れたその店で、翌日から開業するという離れわざを演じて、市民たちをあッと言わせたものだ。

こんなところから、学歴のない四十六歳の支店長は、どうやら自分の才能を過信してしまった模様であった。彼は易学にも凝っていたが、その易断にも災いされていたのかも知れなかった。

まもなく第一の蹟きが起った。

それは、福島県下の約四千町歩の山林を開発して、国立公園を誘致したいという一ペテン師に、本店の許可も得ずに、独断で四百五十万円を融資したことから始まる。

原木だけで一千万石あるというので、彼は山林の権利書をタンポに、融資を承諾したのだ。

が、なんとその権利書は偽造されたものだった――。

当時の四百五十万円といえば、現在の五千万円以上の値打ちがあった。それが全くの不良貸付となり、コケついたのでから、彼が慌てたのも無理はない。

信田は、その穴埋めのため、必死の工作を続けなければならなかった。そして、東奔西走している失先に「東京の秋葉原の倉庫に隠蔵物資のキャラコが大量にある。この払下げを受けたら大儲けができるが……」という耳寄りな話を、持ちかけられたのであった。話してくれたのは、佐野弘毅という懇意な少壮実業家だった。信頼できる人物と思ったから、彼は早速その話に飛びついた。

そして、繋ぎの運動資金として、六十万円を用立てたのである。ところがナシの飛礫^{つよて}なので信田は気が気ではなくなった。たまりかねて資金を用意して上京してみると、払下げが遅れているのは占領軍の許可が下りないからだということだった。

信田は、占領軍の高官へのツテを求めて、東京を走り回った。そこへ登場してくるのが「マダム豊田」こと豊田康子だ。こうして田舎支店長の信田頼徳は、魔女に魅入られるとも知らずに、横浜の豊田邸を訪れたのであった。

「どうです、信田さん、この部屋にある美術品だけで、時価二千万円だそうですよ」

仲介者の小川は、得意そうに話した。

信田が肯いて、なおも室の中を見廻していると、音もなくドアがあいて、一人の女性が姿を現わした。

真ッ赤な、粗い格子縞の上衣に、ネズミ色のスラックスを穿いている。年の頃は、三十四、五歳と聞いていたが、まだ二十七、八のような若々しい感じだった。

彼は不図、男装の麗人、水の江滝子を連想した。しかし顔立ちは、木暮実千代によく似ていて、色も白く気品がある。

唇はよく引き締っていた。少し顎がはっているのは、意志が強い証拠であろう。眼元は涼しく、鼻すじもすっきりとしていて、どこことなく高貴な感じだが、それでいて非常にセクシーなものが軀全体から溢れていた。

背丈は五尺二、三寸だろう。すらりと均斉がとれている。しかも洗練されて、落ち着いた物腰だった。

ハふーむ。この女性なら、アイケルバーガー中將も一目で参ってしまったろう！

信田頼徳は、第一印象で先ず彼女に圧倒されてしまった。

紹介が終り、お互いの挨拶が済むと、マダム豊田は謎のような微笑を浮かべて、
「ここでは女中に立ち聴きされますから」

と言ひ、自分から先に立つて、二階の寢室をかねた居間に客を案内するのだつた。

その部屋も、贅沢な調度品で飾られていた。奥の方には、大きなダブルベッドが置かれ、金糸で刺繍されたカバーが掛けられてある。

彼女は、自分の机の傍の椅子に腰を下ろして、信田たちにソファアへ坐るようにと奨めた。その居間の中には、言うに言われぬ香水のいい匂いが溢れていて、信田を夢心地にさせるのだつた。

「彼氏が居られないので、さぞお淋しいことでしょうな」

小川が笑いながら言つた。するとマダム豊田は、かすかに羞らいを見せ、

「ホホホホ、でもお元氣だとかで、何よりだと思つてますの」

と、意味あり氣に机の上を眺めるのだ。

信田はその方を見て、心の中で「あっ」と叫んだ。その彼女の傍らの机には、アイケルバーガー將軍の写真が、麗々しく飾られていたのであつた。

信田頼徳は、この巧妙なお膳立てに、ころりと參ってしまったのである。彼はある人を介して、すでに彼女に三十万円の現金を贈つてあつた。

だから、秋葉原の進駐軍が差し押えたキャラコの話が出るのかと思つていゝと、意外にも彼女は、スタンダード石油の販売権をとる氣はないかと、別の話を切り出してきたものだ……。

これには信田も戸惑った。

しかし、彼も馬鹿ではないから、石油の販売権をとったら、ボロ儲けができること位、知っている。会見が終ったあと、女の弁舌に魅せられた信田は、佐野や小川たちに相談した。

「秋葉原のキャラコを売り捌けば、どう低く見積っても七、八千万円は浮く。この金を投資するんだ。マダム豊田に、スタンダード石油の販売権を取って貰い、ひとつ石油事業に乗り出そうじゃないか……」

——後になって信田は、どうして銀行支店長の仕事を抛り出し、隠匿蔵物資だ、スタンダード石油だと夢中になったのか判らない、と述懐している。だが、その真相は、占領軍——特にCICをバックにしていると自称するマダム豊田の巧みな舞台装置と、演技力とに惑わされたからであろう。あるいは彼は、彼女の躰から発散する妖しい色気に、たふらか誑されたのかも知れない。

信田穎徳は、マダム豊田から打ち明けられたこの石油事業の計画に、すっかり虜とりこになってしまった。

配給される石油の一手販売だから、仕事は単純である。しかも複雑な工場設備なども不要だった。単純な田舎支店長は、スタンダード石油の販売権を獲得した時を夢見て、もう浮き浮きしてしまうのである。

「これは理想的な仕事だ。退職した銀行員たちを、この会社で雇ってやろう……。四百万や五百万の穴埋めなどわけもなくできる！」

信田が有頂天になっているのを見たマダム豊田は、頃はよしとばかり、

「販売権をとるために、スタンダード石油の極東支配人を招待する。そして家を一軒プレゼントしたいから……」

と、五百万円の運動資金の調達を、彼に申し入れたのであった。

「この仕事は、私も一生懸命です。もう三百万円も費いましたのよ！」
と、こともなげに彼女は笑うのだ。

マダム豊田のプランによると、先ず東北六県の販売権をとり、資本金は一億円とする。そして「常陽石油KK」という社名にして、販売代金はすべて常陽銀行の支店に集めるというのだ。しかも本社を信田のいる郡山市に置くというのだから、全く夢のような話だった。

信田は資金の調達を約束し、数日後、郡山支店でマダム豊田の秘書に百万円の小切手を渡したのである。この日から、大きな転落が始まった。

春期支店長会議で、郡山支店は、またもや連続三回の優勝をして、表彰を受けた。

その表彰の宴会が終ったあと、信田は専務から呼ばれて、十日以上銀行をあけていたことを